130531
小幡ゼミ

第５章　労働過程と価値増殖過程

第２節　価値増殖過程

イ・ソホン

＜内容要約＞

(201)

*資本家による商品生産の目的

- 交換価値をもつ使用価値、販売予定の物品、商品を生産
- その生産のために必要な諸商品の価値総額よりも大きい価値をもつ商品を生産

*商品：使用価値と価値の統一
→商品の生産過程：労働過程と価値形成過程との統一

*商品の価値規定
…商品の価値は、その使用価値に物質化されている労働の分量によって、その生産のために社会的に必要な労働時間によって、規定されている。
このことは、労働過程の結果として…生産物についても当てはまる。

*生産物に対象化されている労働の計算　←「労働対象生産」になっていないか？
1)生産手段（糸の例）　綿花＋紡錘 ⟶ 綿糸

- 原料：10 ポンドの綿花　－　10 シリング
- 労働手段：紡錘　　－　2 シリング

→12 シリング＝24 労働時間＝2 労働日

(202)

綿花と紡錘量の生産に必要な労働時間
：糸の生産に必要な労働時間の一部分

したがって、糸の価値（… ）が考察される限りでは、綿花そのものおよび消耗された紡錘量を生産するために、最後に綿花および紡錘で糸をつくるために、通過させられなければならないところの、さまざまな特殊的な、時間的にも空間的にも分離されている労働諸過程は、同じ一つの労働過程のさまざまな相次いで現れる諸局面として見なされうる。

(203)

→12 シリングの価格で表現される生産諸手段の価値は生産物の価値の構成部分をなす。

ただ、二つの条件が満たされなければならない

- ✓ 綿花と紡錘とは現実にある使用価値の生産に役立っていること
- ✓ 与えられた社会的生産諸条件の下で必要な労働時間だけがついやされたこと

2)紡績工の労働
→労働過程中にある場合とはまったく別の観点から考察

- 労働過程では、綿花を糸に転化させるという目的にそった活動が問題
  →紡績工の労働は、他の生産的諸労働とは独特に相違するもの
- 価値形成過程では、紡績工の労働が価値形成的である限り、他の労働（たとえば、鑽開工の労働）とまったく相違しない

ただこの同一性によってのみ、綿花栽培、紡錘製造、および紡績は、糸価値という同じ総価値の、単に量的にのみ相違する諸部分を形成しうるのである。

(204)

- 労働過程のなかで、労働はたえず不静止の形態から存在の形態に、運動の形態から対象性の形態に転換
  →いまや、決定的に重要なのは、この過程の継続中に社会的に必要な労働時間だけが消費されるということ
  ∵社会的に必要な労働時間だけが価値を形成するから

「何が「社会的」に必要」と規定するのか。市場における需要に先行して決定できるか。

- 労働そのものと同様に、原料および生産物もまた、労働過程の立場から見た場合とはまったく別に、一定分量の労働の吸収者としてのみ意義をもつ

(205)

「市場」価値とは異なる概念か。同じか？

（糸の例）

- 労働力の日価値：3 シリング　←6 労働時間が体化
  ；それだけの労働分量が労働者の日々の生活手段の平均額を生産するため必要
- 10 ポンドの綿花＋6 労働時間→10 ポンドの糸
- 10 ポンドの糸の総価値
  ：２労働日（綿花と紡錘量）＋1/2 労働日（紡績過程）
  ：15 シリング

わが資本家は愕然とする。生産物の価値は、前貸された資本の価値と同じなのである。（…）というのは、その糸の価値はもともと綿花、紡錘、および労働力に配分されていた諸価値の合計でしかなく、そして既存の諸価値にこのような加算がなされただけで決して剰余価値は発生しえないからである。

(207)

*剰余価値の形成
：労働力のなかに潜んでいる労働（労働力の日々の維持費）と労働力が遂行できる生きた労働（労働力の日々の支出）の量的差から

「剰余の生産概念から、維持概念に後退している。

(208)

- 前者は労働力の交換価値を規定し、後者は労働力の使用価値を形成
- 決定的なものは、労働力商品の使用価値の独特さ：価値の源泉であり、しかもそれ自身がもっているよりも多くの価値の源泉である
- 労働力の売り手は、他のどの商品の売り手とも同様に、それの交換価値を実現してそれの使用価値を譲渡

*資本家による労働力の使用価値の消費
20 ポンドの綿花＋12 労働時間→20 ポンドの糸
；５労働日の対象化：４労働日（綿花、紡錘）＋1 労働日（紡績労働）
；（金表現）30 シリング
　　＞　24 シリング（生産手段）＋3 シリング（労働力）

(209)

こうして二十七シリングは三〇シリングに転化した。それは三シリングの剰余価値を生んだ。手品はついに成功した。貨幣は資本に転化した。

→商品交換の法則は少しもそこなわれてはいない

- 資本家は買い手として、それぞれの商品（綿花、紡錘量、労働力）にその価値どおりに支払い、それらの商品の使用価値を消費したのである

- 資本家は市場に立ちもどってきて、糸をその価値よりびた一文も高くも低くもない値段で売る

→この全過程すなわち彼の貨幣の資本への転化は、
- 流通部面において行われるのであり
  （∵商品市場における労働力の購買によって条件づけられているから）
- しかも流通部面において行われるのではない
  （∵流通は生産部面において起こる価値増殖過程を準備するだけだから）

*価値形成過程、価値増殖過程、労働過程
- 価値増殖過程：ある一定の点（資本によって支払われた労働力の価値が新たな等価物によって補填される点）を超えて延長された価値形成過程
- 価値形成過程と労働過程の比較
  →前者では労働の量的側面、後者では質的側面が考察される ← 宇野が「生産過程」として、命令と指揮の関連を考えたことの意義は？ なぜ命令が合算可能なのか

---(210)

* 価値計算の諸条件
：労働は、使用価値の生産に費やされた時間が社会的に必要である限りでのみ計算にはいる
- 標準的諸条件：社会的に一般的な労働手段・原料の品質
- 労働力そのものの標準的性格
- 原料および労働諸手段が、目的に反して消費されてはならない

---(211)

*生産過程の異なる二側面
- 商品の分析での、使用価値を創出する限りでの労働と、価値を創造する限りでの同じ労働とのあいだの区別→生産過程の異なる二側面の区別として表れた
- 労働過程と価値形成過程との統一としての生産過程：商品の生産過程
  労働過程と価値増殖過程との統一として： 資本主義的生産過程、商品生産の資本主義的形態

*価値増殖過程における単純労働と複雑労働の問題
- 単純な社会的平均労働（例：紡績労働）であるか、より複雑な労働（例：宝石細工労働）であるかは価値増殖過程にはまったくどうでもよいこと

---(212)

- 剰余価値は、労働の量的な超過によってのみ、同じ労働過程の時間的延長によってのみ生じてくる

---(213)

- 他方では、どの価値形成過程においても、より高度な労働は、つねに、社会的平均労働に還元されなければならない。

＜論点＞ 労働力の補填 と 生産手段の補填の区別

- 価値増殖過程の規定においては「補填」がその基準にある。これは、再生産や補填に技術的確定性がない商品（サービス、知識財）の生産の場合にも適用可能であるのか。

- 価値形成・増殖過程における資本家的労働（管理）の問題

- 補償原理について（平野さん） 注18